

1966(昭和41)年にわが国に理学療法士が誕生した。今日に至る46年の歴史のなかで理学療法士のキャリア形成、あるいはキャリアの成功について、議論の必要は乏しかった。しかしながら、多くの理学療法士の養成が進み、関係各界からそのキャリアモデルおよびキャリア形成方法の可視化の必要性が指摘されている。また、プロフェッショナルリズムを基盤としたキャリアモデルの多様性を許容していくパラダイムシフトも求められている。そこで、本特集では一般的なキャリアデザイン論を整理していただき、10名の理学療法士のキャリアモデルを紹介する。

■キャリアデザインの意義と役割(神戸康弘論文)

キャリアとは、たった1回限りの仕事生活における節目での選択の流れである。それを振り返ってみることは、これから進むべき道を考えるヒントになる。キャリアをデザインすべき時期、デザインとは何か、そして人生において「真の個性化」が始まる中年期のキャリアの考え方に焦点を当ててまとめた。

■理学療法士としてのキャリアデザイン(内山 靖論文)

理学療法学を修めた者が自己実現を果たす過程においては、理学療法を広く社会に適用する視点をもつことが基本となる。自身のキャリアアンカーを自問し、中堅での中だるみが生じやすい専門職の特性を理解しつつ、計画的な偶然性を含めたキャリアパスを楽しく構築していくことが望まれる。

■理学療法士のキャリアモデル

1. 専門理学療法士として(田中直樹論文)

近年の理学療法士の増加に伴い、理学療法士の活躍する場が増えてきた。そのため、理学療法士としてどのようなキャリアデザインを構築し社会に貢献していくかを考えることが重要になると考える。そのモデルの1つとして筆者の理学療法士養成校卒業から専門理学療法士を取得するまでのキャリア、専門理学療法士取得後の取り組みについてまとめた。

2. 部門管理者として(後藤伸介論文)

医療における組織が患者のリハビリテーションを効果的に支援しうするためには、理学療法士をはじめとする多職種がチームとして機能していることが重要である。そのためには、その組織をマネジメントする者、すなわち部門管理者が欠かせない。本稿では、リハビリテーション部門における管理者の役割や業務内容を著者の経験に基づき述べるとともに、部門管理者としてのキャリアアップに向けた姿勢を提示した。

3. 教育者として(大西秀明論文)

筆者は理学療法士免許を取得した後、6年間の臨床経験を経て大学院に進学し、大学院博士後期課程修了後に大学設置準備室に入職した。その後、大学教員(講師、教授、学科長)に至るまでの個人的なエピソードや経緯を紹介させていただく。

4. 研究者として(榎間春利論文)

わが国において1966年に理学療法士が誕生して46年になる。当時、理学療法士が基礎医学を担当する時代が来ると考えていた方は少なかったと思う。筆者は基礎医学教室で学位を取得し、鹿児島大学で理学療法学専攻および作業療法学専攻の学生に対して人体構造学(解剖学)を講義している。本稿では、筆者が基礎医学を担当する大学准教授に至るまでのキャリアと現状について、大学の研究者としての立場から提示する。

5. 社会起業家として(露木昭彰論文)

理学療法士は社会起業家として値する職種である。しかし、介護保険に特化した業務展開を行うと社会情勢により左右されてしまうため、今後は新たな展開が必要である。これまでのデザインではなく、先を読んだ事業運営とぶれることのない目的を持つことが起業するためには重要であり、そのためのキャリアを意図的にデザインすることが必要であろう。筆者がこれまで歩んできた経緯を紹介しつつ、私論を述べる。

6. 地方公務員として(森倉三男論文)

地方公務員である理学療法士は直接支援のみならず、その自治体の保健福祉施策を形成する重要な

役割機能がある。現在、公務員は専門性を基礎に多様な能力を発揮して効果的な行政施策を進めることが期待されている。多くの理学療法士が社会に送り出されるなかで、公務員職となり長期的なキャリア形成によって住民ニーズに応える施策を展開できる人材が求められている。

7. 政治家として（島田真理論文）

超高齢社会が到来し、「医療・福祉・介護」は時代のメインテーマとなった。働きながらの子育てや介護を経験した女性のキャリアと理学療法士歴 26 年のキャリアを活かして、理学療法士初の政治家となり早 5 年になる。大阪市会議員として仕事をする中で、これまで培った専門性を政治の分野で発揮することの大切さを実感している。

8. 女性理学療法士として（谷口千明論文）

理学療法士は男女を問わない専門職であるが、男女の性差はなくせるものではない。それぞれのライフイベントに応じたキャリアデザインが必要となるであろう。本稿で、女性理学療法士として、就職、結婚、子育てを経て部門管理者となり、現在に至るまでの自分を振り返った。それらに加えて今後の自分を想像し、女性理学療法士としてのキャリアデザインを自分なりに考えてみた。

9. 事務系管理者として（桐田泰蔵論文）

本稿では、医療職出身の事務職として業務をすることになるまで筆者が歩んできた経緯や、組織管理・運営業務を行いながら戦略的な思考を身につけていった過程、また理学療法士出身の事務系管理者としてどのようなことが求められているかについて述べた。

10. 海外で働く理学療法士として（小倉秀子論文）

筆者は、米国で理学療法士として働いているが、アメリカで働くことを計画していなかったし、キャリアを考えてデザインしたからこうなったわけでもない。未来が見えないながらも、わがなすことはわれのみぞ知るで、好きな道を捨てず、毎日を大切にすることで、キャリアを積んだ。こんな生き方でも何とかなっている。明るい未来が見えずに不安な日々を過ごしていらっしゃるセラピストの方へのメッセージになればと思う。